

■ 本文

春はあけぼの。やうやう〔①〕白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる〔②〕。

夏は夜。月のころはさらなり〔③〕、闇もなほ、螢の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし〔④〕。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど、飛びいそぐさへ〔⑤〕あはれなり。まいて〔⑥〕雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし〔⑦〕。日入り果てて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もて渡るも、いとつきづきし〔⑧〕。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりて、わろし〔⑨〕。

■ 設問 (全24問)

1. 春の段（「春はあけぼの。～たなびきたる。」）には、夏・秋・冬の段にある「をかし」「あはれなり」のような心情を直接表す言葉が用いられていない。作者はどのような方法で春の美しさを読み手に伝えているか、説明しなさい。
2. 傍線部①「やうやう」を現代仮名遣いに直し、その意味を答えなさい。
3. 「山ぎは」と「山の端」について、それぞれが指す部分の違いを説明しなさい。
4. 「あかり」（すこしあかりて）はどのような意味か答えなさい。現代語の「明かり（ライト）」とは意味が異なる点に注意して説明しなさい。
5. 本文中の「紫だちたる」の「たち」は、ある動詞の連用形である。その動詞の終止形（基本形）と意味を答えなさい。
6. 傍線部②「たなびきたる」の「たる」について、文法的に説明しなさい（助動詞の基本形・意味・活用形を含めること）。
7. 傍線部②「たなびきたる」の一文は、文末を言い切らず連体形で結んでいる。この表現の効果を簡潔に述べなさい。
8. 傍線部③「さらなり」の意味を答えなさい。また、ここでは何が「言うまでもない」と述べられているのか、内容を補って説明しなさい。
9. 「闇もなほ」の「なほ」、「はたいふべきにあらず」の「はた」の意味をそれぞれ答えなさい。
10. 傍線部④「をかし」と本文中の「あはれなり」とでは、表す美意識・心情にどのような違いがあるか説明しなさい。
11. 「秋は夕暮れ。」で始まる一文を、「飛びいそぐさへあはれなり」までを中心に現代語訳しなさい。
12. 傍線部⑤「さへ」、傍線部⑥「まいて」の意味をそれぞれ答えなさい。「まいて」については語の成り立ち（もとの形）にも触れること。

13. 傍線部⑦「いとをかし」を現代語訳しなさい。また「いと」の意味も答えなさい。
14. 傍線部⑦「いとをかし」とあるが、作者は秋の何を見て「いとをかし」と感じているのか、本文に即して答えなさい。
15. 「冬はつとめて。」の「つとめて」とは一日のうちのいつごろを指すか答えなさい。また、なぜ作者は冬は「つとめて」がよいと考えているのか、本文に即して説明しなさい。
16. 「言ふべきにもあらず」「いふべきにあらず」の「べき」は助動詞「べし」の活用形である。その活用形（～形）と、ここでの意味（可能・当然など）を答えなさい。
17. 冬の段で、作者は何を「つきづきし」と感じ、何を「わろし」と感じているか。対比に注意して説明しなさい。
18. 傍線部⑧「つきづきし」、傍線部⑨「わろし」の意味をそれぞれ答えなさい。
19. 「火桶の火も白き灰がちになりて」を現代語訳しなさい。
20. 次の語を品詞分解しなさい。『飛びちがひたる』（螢の一の部分）。それぞれの品詞・はたらきがわかるように答えること。
21. 作者は四季それぞれについて、一日のうちのどの時間帯（または時刻）が最も趣があると述べているか、春・夏・秋・冬の順に答えなさい。
22. この章段全体を通して、作者がものの美しさをとらえるときの視点には、どのような特徴があるか。具体例を一つ挙げて説明しなさい。
23. 【文学史】この作品の作者名・成立した時代・文学のジャンル（種類）を答えなさい。
24. 【文学史】『枕草子』とともに「古典三大随筆」と呼ばれる作品を、作者名とあわせて二つ答えなさい。また、同じ平安時代に紫式部が書いた長編物語の作品名を一つ答えなさい。